

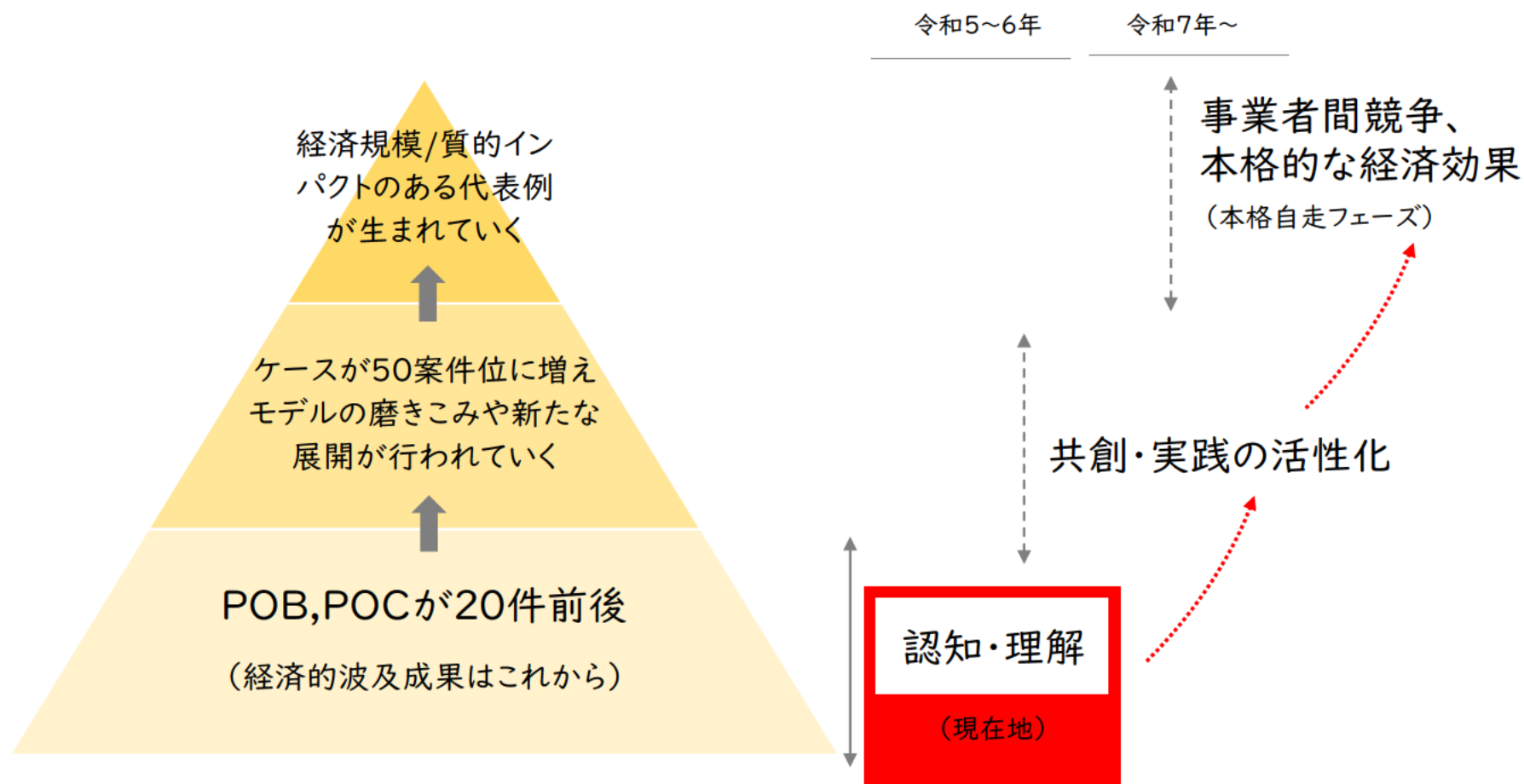
モデル発展に向けた、表彰制度関連の議論進捗について

Hakuhodo DY Matrix / 博報堂

根本豊

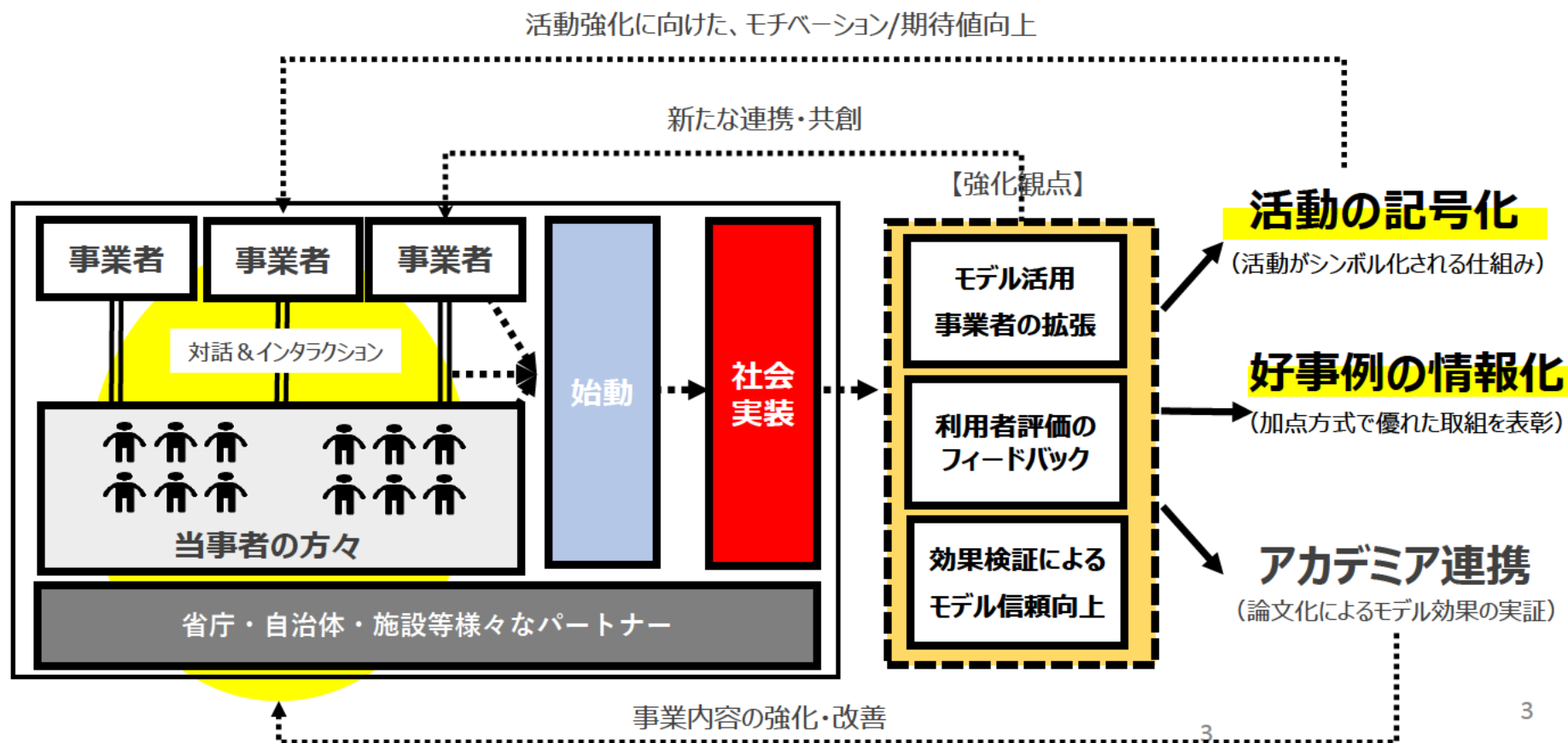
当事者参画型開発モデルの中期ブランディング・ストーリー

- ✓ 現状（令和5年度）は、モデルや活動体の認知と内容理解を拡げていく段階にある。
事業者へのメッセージを強めるためには、**経済産業省や厚生労働省、あるいはアカデミアとも連携した産官学連携のスキームにより「モデルの認知度・信頼度向上と、旗振り」が必須。**
- ✓ 今後、活動が強化されフェーズが進んでいくと、企業とメディアが連携する形で民間主導の推進体制も可能になっていく可能性がある。（実施すること自体に価値があるフェーズから、商品サービスの質で差別化競争が行われ、イノベーション競争が起きる環境に移行できることが望ましい）



当事者参画型開発モデルの中期ブランディング・ストーリー

- ✓ 認知・理解を向上させるフェーズである令和5年～6年度において、当事者参画モデル自体の認知を上げ信頼度を上げるために、モデルを活用する事業者が増える「仕組み」の開発・整備が必要。
- ✓ 具体的には、活動のシンボル化、好事例の情報化、アカデミア連携（有効性検証）などを行うことで、取組活動が活性化され、好事例が生まれるエコシステムを構築したい。



現状決定した主なブランディングアクションの整理

- ✓ 現状の対外的なブランディングアクションは、以下の3つが進行中。
- ✓ オレンジイノベーション・プロジェクト(Webサイト)・認知症イノベーション・カンファレンスは今年度実施。
オレンジイノベーション・アワードは来年度実施を想定。

オレンジイノベーション・プロジェクト(対外活動における全体の傘)



<https://www.dementia-pr.com/>

オレンジイノベーション・アワード (当事者参画型開発に取り組む企業をアイコン化)



デザイン仮

認知症イノベーション・カンファレンス (先行企業や今後の発展性に関するダイアログ)



オレンジイノベーション・アワード(表彰・活動応援施策)について

- ✓ アワードの対象は、①当事者参画を通して開発された「モノ・サービス」②「当事者参画開発取り組みそのもの」である「チームの活動」「個人のリーダーシップ」を想定し、仕組みを立ち上げることを検討。
- ✓ 表彰制度の目的(メリット)は、認知症当事者の「生活課題の解決」や「やりたいことの実現」の助けとなる製品・サービス(=認知症の方にとって使いやすい製品・サービス)開発の応援や、様々な業界・領域にて当モデル認知が拡がること。
- ✓ 認知症当事者にとっても、企業にとっても良い表彰制度とするために様々な業界の委員や当事者のご意見をお伺いし、内容を精査している。

①オレンジイノベーション・アワードGOLD (特に優秀な3~5のケースを審査で選出する)



オレンジイノベーション・アワード
GOLD 2024



※画像はイメージ
企業の広報や商品紹介に活用される想定

②オレンジイノベーション・パートナー (申請し要件を満たせばパートナーに認定され、ロゴなどの使用が可能)



デザイン仮

オレンジノベーション・パートナー認定プロセス（当事者参画プロセスの規定）

- ✓ 当事者とともに「当事者参画プロセス」をしっかりと実施している取組のみを認定できる構成にしたい。具体的な「当事者参画プロセス」は当事者参画開発の手引きに準じて設定する予定。
- ✓ 立ち上げ数年間は、認知症の当事者参画モデルの認知を広めることが重要になるため、できる限り裾野を広げた応募条件にしていくことが望ましいと考える。（自己申告制を想定）

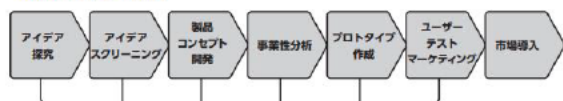
①開発プロセスのうち、どのタイミングで当事者参画が行われたか？（選択式）

②当事者参画方法は以下の手法のうちどれにあたるか？（選択式）

③当事者参画を通して、どのような気づきを得たか？
当事者の意見を考慮したうえで、商品/サービス開発にどのような影響を与えたかを記載（自由形式）

1

一般的な開発プロセス



2

- 手法 1 One to one インタビュー（デプスインタビュー）
手法 2 座談会（グループインタビュー）
手法 3 行動観察・同行調査
手法 4 試作品・製品ユーザーテスト
手法 5 ワークショップ
手法 6 日記・記録式調査
手法 7 アンケート調査

3

商品開発過程での
ファインディングス/
影響など

※参考：当事者参画開発の手引き

オレンジイノベーション・アワードGOLD・審査委員方法

- ✓ 認知症当事者の審査を担保し、当事者と共に創るコミュニティ機能を果たすことを念頭に置く。よって、審査には認知症当事者複数名に参加いただく想定。
- ✓ 更に、認知症市場視点、ビジネスイノベーション視点、認知症家族の視点も大切に、審査員を選定予定。その際、公平性/透明性が担保させる審査員と審査方法になるよう検討。

認知症当事者複数名



認知症市場視点

認知症分野に知見がある
アカデミアの先生方など

ビジネス
イノベーション
視点

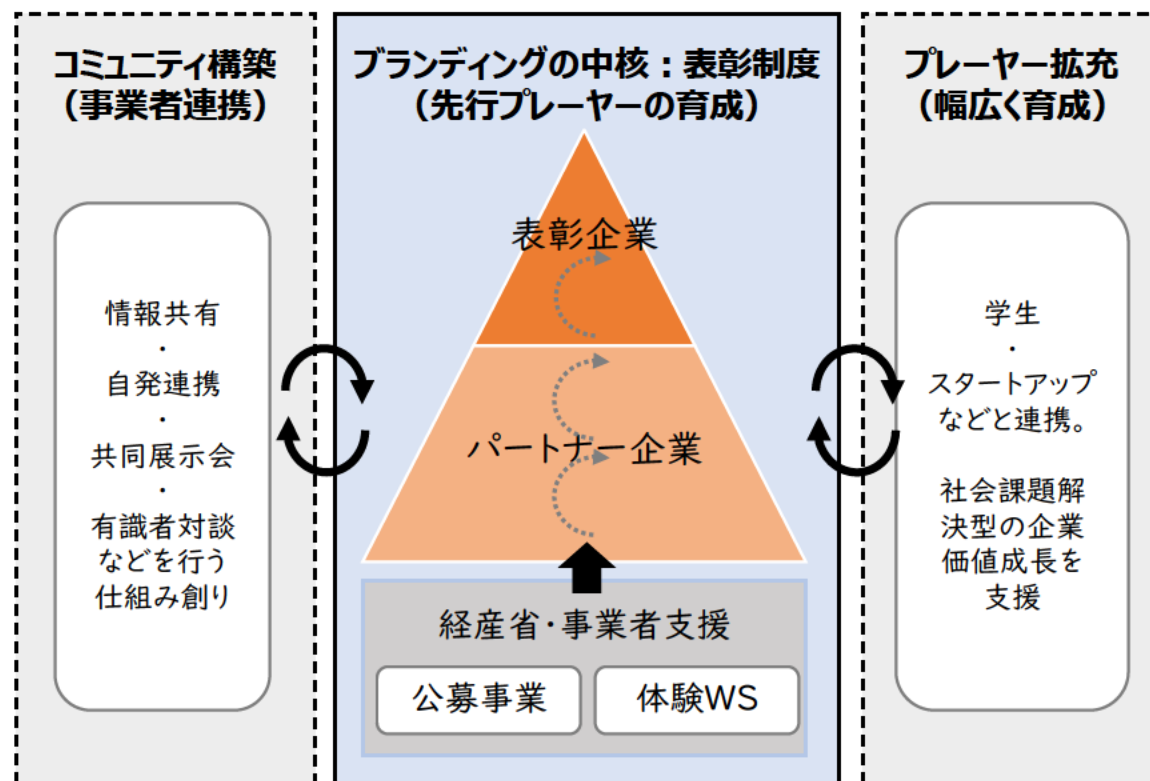
企業ビジネスサイドの
イノベーションに知見がある有識者

認知症家族の視点

認知症当事者の理解もあり、
メディア・生活者からも認知のある文化人

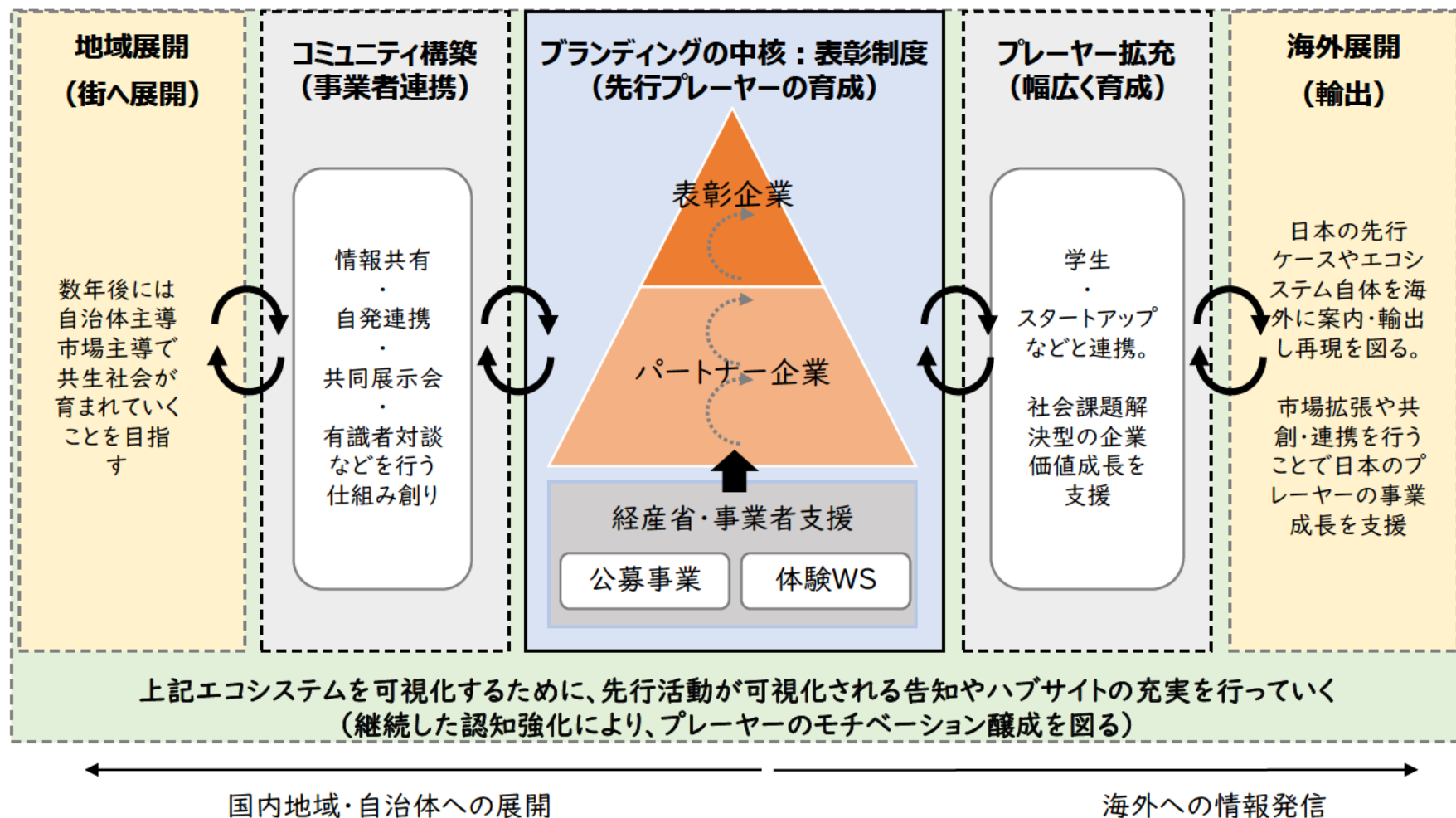
今後に向けて:更に多様なプレイヤーが集まる仕組み構築に向けた議論

- ✓ 令和6年度以降は、数年後の本格的なエコシステム構築を見据えて、プレイヤー同士のコミュニティ構築とプレイヤーの裾野を広げる活動を重点検討として進めていく。



今後に向けて:更に多様なプレイヤーが集まる仕組み構築に向けた議論

- ✓ 積極的な事業者や自治体が集い、情報共有や共創に向けた検討が出来るコミュニティ機能の構築を検討したい。企業参画セッションにおいても、各委員からコミュニティ機能の有用性について発言が寄せられた。
- ✓ また、学生やスタートアップなどにプレイヤーを拡充し、事業者・当事者・伴走者(省庁・メディア・クリエイター・マーケッター等)との共創の型自体をサクセスケースとして国内外に発信していくことも視野に入れる。



当事者からの声を聞いて感じたこと(今後の議論テーマ)

当事者参画型開発モデルは、有効なサービス商品で満たされた共生社会に向けて
事業者の開発過程に当事者の声を聞くプロセスを組込むことと定義してきた。

一方で、社会は、事業者・当事者に限定されるものではなく「すべての生活者」で成り立っている。
よって、本来は事業者が活動する前提として「社会全般で認知症当事者の理解が増していく」状態が望ましい。
今後は、社会全般に当事者への理解が増えながら、有効なサービスが増える仕組み・施策についても検討したい。

